

「藤戸」の劇的構成

—平家物語の「藤戸」・謡曲の「藤戸」から—

山岡 萬謙

倉敷芸術科学大学教養学部

(1998年9月30日 受理)

1. はじめに

中古文学は『源氏物語』を中心とするが、中世文学はそれとは全く異質の『平家物語』を中心とする。なぜなら軍記物語の頂点に位置する『平家物語』は、表現・内容ともに中世的な新しい叙事詩文学の創造に成功した作品といえるからである。いうまでもなくこの物語は、平氏興隆と栄華の頂上から一族の滅亡までを描いた90年間に及んで描かれている。しかし、大部分を占めるのは後の10年間の事変なのである。平氏滅亡の一大悲劇を作者は自己の人生観と豊富な虚構とによって、悲壮な運命悲劇として描いたのがこの10年間である。さらに、この栄枯盛衰の運命的な推移を主題に多くの人々の哀話を綴っているのである。こうした哀話は平氏のみならず源氏にまでも及んでいて、まさに冒頭に述べている「諸行無常」によって全篇が貫かれているといえよう。これら哀話として知られているのは、平忠度の和歌への執着、平敦盛の痛ましい最期、那須与一の扇の的などであろう。これらの哀話の背景には、亡びゆく貴族社会と勃興する新興武士階級とが対照的に織り交ぜられ、次々に戯曲的な場面を展開していくのである。

この『平家物語』の巻10に「藤戸」がある。藤戸はわが郷土に位置する渡し場（現在は陸地となっている）の名称である。『平家物語』にある「藤戸」の哀話は、源氏方の武将佐々木盛綱が備前児島への浅瀬を聞き出した土地の男を殺し、先陣の功を独占するという筋である。そして、盛綱に続いて3万騎の源氏は5町の海峡を渡り、平家を海上に追い払うというのである。

一方、「謡曲」の「藤戸」は、『平家物語』の後日談としての哀話となっている。ここに登場するのは、殺された土地の男の亡霊と母親である。盛綱はこの地の新領主として国入りするが、母親は子を返せと叫び、亡霊は恨みを述べるという筋である。この作品は能楽の中の4番目（現在物）である。すなわち、主人公が現実的な人物ということである。5番立の演能順のうちの4番目は「安宅」のように源平時代の武士が主人公である場合が多く、「藤戸」もこれに類するものである。また、4番目には「隅田川」のような狂女物もあって、子の行方を尋ねる母親が主題となっているものもある。

「謡曲」の題材の範囲は極めて広く、上古では『古事記』『万葉集』、中古では『古今

集』『伊勢物語』『源氏物語』『大和物語』、中世では『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』『義経記』『曾我物語』などから取り、さらに古今の伝説巷談からも取っている。これらのうち、名曲は多く『平家物語』からの取材であって、戯曲としての価値が高い。「藤戸」も例外なく、極めてすぐれた作品であるが、その典拠である『平家物語』のすぐれた劇的構成を無視してはならない。そこで、『平家物語』の「藤戸」を中心に据えて、「謡曲」の「藤戸」との関連について考察してみようと思うのである。以下、論述中にある古文の引用は『岩波古典文学大系』によった。

2. 「藤戸」の劇的構成 その1（音楽性）

『平家物語』は平曲によって語られたことから、極めて多くの異本を生じた。その中で文学的価値が最も勝れているのは12巻の流布本である。このように、平曲は、『平家物語』が広く国民に愛読され、後世文学に甚大な影響を与えた要因となっている。その平曲とは、琵琶を伴奏として『平家物語』を語る音楽をいう。江戸時代には、「語る平家」と「読む平家」とを区別して、前者を「平曲」と言うようになった。今回は、「読む平家」における音楽性を、「藤戸」の戦場場面に絞って文章研究として取組んでみようと思う。

「藤戸」の音楽性を論じる前に、その文章から考えてみなくてはならない。そもそも、『平家物語』は明快流麗な和漢混交文で音楽性に富んでいる。しかも、内容に応じて変化の妙があることに着目される。すなわち、合戦の修羅場を描く場合には、漢語俗語を多く交えた簡勁な文体を用い、みやびやかな情趣の世界を写す時には、優雅な擬古文を用い、悲哀な別離を叙す場合には、仏語を多く交えたしめやかな文を用いている。さらに文飾としては、叙情的な記述には対句や七五調を列ね、戦場の光景を叙する時には促音や撥音を多くして力強い表現を用い、関東武士の言葉には板東方言を写して、面目躍如たるものがある。以上の視点で「藤戸」の合戦を検討する前に、下記の記述が必要となろう。

ここで「藤戸」の歴史年表（藤戸に記してある年月日による）を示し、梗概にふれてみよう。

寿永3年（1184年）	7月28日	後鳥羽帝、御即位。三種神器は不在。（元暦元年）
同	上	8月6日－源範頼、三河守となり、源義経、左衛門尉となる。
同	上	9月12日－源範頼、平家追討のため西国下向。
同	上	9月26日－佐々木盛綱、備前児島にて大勝する。
同	上	9月27日－源義経、検非違使五位尉となり九郎大夫判官。
同	上	11月18日－大嘗会が行われる。

平維盛の剃髪、入水の報に接し、北の方も出家して、夫の後世を祈ったと知った頼朝は同情を禁じ得なかった。それにしても、讃岐の屋島では平家の人々が都恋しの日を過ごすばかりであった。一方、源範頼は3万騎の兵を率いて都を出発し、平家を討つべく山陽道に兵を進めた。これに対して平家の方は、平資盛、有盛らが5百余艘の兵船を率いて備前

児島に到着して、備前藤戸に陣を布いに源氏に相對したのである。ところが、船のない源氏は、平家に挑戦されていられただばかりであった。この時、源氏方の佐々木三郎盛綱は、9月25日の夜、ひそかに馬で渡れる浅瀬を土地の男から聞き出し、秘密発覚を恐れてその男を殺してしまう。翌26日、源平対陣する中を、盛綱は馬を打ち入れて平家の船に攻め込んだのである。盛綱の先陣に続いた源氏は、平家を沖に追い散らし、屋島に退かしたのである。後に、頼朝から盛綱の下し文で、備前の児島を盛綱に賜わった。

次に「謡曲」の「藤戸」の梗概も述べておく。

備前藤戸の戦での先陣の功で、児島の地を賜わって国入をした佐々木三郎盛綱は、新領主としての自分に訴訟のある者は申し出るように触れる。すると、盛綱に浅瀬を教えたあぐく殺された浦の男の母親が登場する。そして、その母親は盛綱に対して、せめてわが子の亡き跡を弔い、わが身を慰めてくれるよう懇願する。そこで盛綱は浦の男から浅瀬を教えられた秘密が漏れるのを恐れて殺害し海に沈めたことを自告する。母親の嘆きはひどく自分も殺せと迫るが、盛綱は死者を弔い、その妻子も世に取り立てると言って説得する。そして、盛綱は大般若経を読んで浦の男の弔いをする、浦の男の亡霊が水上に現われてわが身の不運を嘆く。しかし、思いがけない盛綱の弔いによって、一切の苦しみを離れて「彼岸」に至りついて、やがて浦の男は成仏の身となるのであった。

さて、以上述べた「藤戸」の文章はどのような音楽性があるのだろうか。『平家物語』が琵琶によって語られたこと自体が音楽性のある証拠であるのはいうまでもない。したがって、ここでは平家琵琶の独奏曲を論じることはしないで、「藤戸」の浦の男の出会いと合戦の場面との文章を検討して、その音楽性をしらべてみよう。

① 音便 (P 294～P 296)

たやすう	—たやすく	乗つて	—乗りて	かたらつて	—かたらひて
巻きなんど	—巻きなど	おほう	—おほく	案内しつたる	—案内したる
東(ひんがし)	—ひがし	たやすう	—たやすく	わたつて	—わたりて
ふかうは	—ふかくは	およいで	—およぎて	南(みんなみ)	—みなみ
あさう	—あさく	切つて	—切りて	すててんげり	—すててけり
乗つて	—乗りて	知つたり	—知りたり	追つついて	—追ひつきて
物のついで	—物のつきて	渡いたる	—渡したる	あがつて	—あがりて
追うて	—追ひて				

② 対句 (P 294～P 296)

- 月がしらには東に候一月じりには西に候
- ひざ・こし、肩に立つところもあり—鬢のぬるるところもあり
- 馬のくさわき・むながいづくし・ふと腹につくところもあり—鞍つばこす所もあり
- 或は舟ふみしづめて死ぬる物もあり—或は舟ひきかへされてあはてふためくもの

もあり

- 源氏は兎島にうちあがつて、人馬のいきをぞやすめける一平家は八嶋へこぎしりぞく

③ 漢語

- 安内 ○ 存知 ○ 両方 ○ 郎等 ○ 下臈 ○ 狼藉
○ 人馬 ○ 希代

④ 会話文

- 浦の男の発言部分に「候ふ」が12回ほど用いられている。

⑤ その他

- 5音7音の音数律を随所に用いている。

以上の5つの項目が、藤戸の合戦に関する文章上の音楽性である。したがって、ここには、他の合戦に多く描かれている擬声語や擬態語はほとんどなく、俗語や方言もない。したがって写実性と迫真性という点ではやや劣る。しかし、軍記物に多い「候」を用い、漢語や音便などを使って簡潔で力強く、また動的なリズムを与えている文章の音楽性には注目しなければならない。

「謡曲」の「藤戸」の音楽性について考察を進めてみる。いうまでもなく能は謡と囃子と形とからなる楽劇である。主役を演ずるシテ、その相手方のワキ、シテまたはワキに従うシテヅレやワキヅレなどが登場して、それぞれ台詞を述べ歌謡を謡い仕種を演じるのである。そして、この外に数人の地謡方が謡曲の地の文を謡い、4人の囃子方が笛・小鼓・大鼓・太鼓を用いて、それぞれの曲を演奏する。従って「謡曲」はこのような組織に必ずるように、役者の台詞及び歌謡と、地謡方の同吟する地謡からなっているのである。この故に、「謡曲」の音楽性は云々するまでもない。ただ、ここでも文章表現の特色としての音楽性を指摘してみようと思うのである。

① 仏語

- 因果 ○前世 ○老少不定 ○管絃講 ○大般若經 ○一切有情
○殺生三界不墮惡趣 ○三途の瀬踏 ○妄執 ○弘誓の舟 ○成仏得脱

② 古歌、漢句の引用

- 暮れてゆく春のみなどは知らねども霞に落つる宇治の紫舟 『新古今集』寂蓮
○ 四つの海波静かなる御代なればはらかのにへもけふ供ふなり『夫木集』藤原家良
○ 海人の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ『古今集』直子
○ しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく『新勅撰集』在原業平
○ 好事不出門、悪事行千里（北夢瑣言）
○ 人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな 『後撰集』藤原兼輔
○ 老鶴心閑カニシテ緩々トシテ眠ル（和漢朗詠集 都良香）
○ 面影を忘れむと思ふ心こそ別れしよりも悲しかりけれ 『続拾遺集』藤原実氏

- ③ 謡う部分は、七五調を基本とする音数律の韻文形式であり、語る部分は候調散文で書かれている。さらに、文中には至る所に掛詞や縁語が用いられている。

以上の3点が、謡曲の「藤戸」における文章上の音楽性である。しかし、これらは謡曲が謡い物の詞章としては当然のことといえよう。こうして「謡曲」の文章は能の本質と巧みに調和しているのであって、演技とあわせて味う時、はじめて古典的情趣にひたることができるのである。

3. 「藤戸」の劇的構成 その2（物語性）

「謡曲」は能楽の詞章であり単なる脚本ではなく、語り物的要素をもつ。中古の『源氏物語』をはじめ諸物語は、個人の読物であったとともに、1人ないし数人以上に読み語られた。すなわち、朗読されたのである。朗詠や声明が流行するにつれて、文章に抑揚や曲節をつけて朗誦するようになり、それに都合がよいように音楽的な文章が発達した。しかし、ここで忘れてはならないのは、あくまでも作品の中心は物語性ということである。謡誦的な表現も、事件の変化に興味をもたせる物語性がすぐれていてこそ生きてくるのである。従って、『平家物語』のいくつかの事件も文才ある古人によって改修せられてきたのである。それを題材とした「謡曲」も、すぐれた物語性をもつことは前述したとおりである。『平家物語』は例外なく、叙事的性格をもち、戦敗者の悲劇的情景を描くところから、弱者に同情する国民の感動を引き起こすことになったのである。

ここで『平家物語』の「藤戸」の浦の男の出会いと合戦の場面との文章構成を検討してその物語性について述べてみよう。

① 登場人物

- 源氏の軍勢3万余騎
- 平家の軍船5百余艘
- 佐々木三郎盛綱
- 浦の男
- 家子郎等7騎
- 源参河守範頼
- 土肥次郎実平

② 背景（場所・時・自然）

- 海（源平間5町）、藤戸
- 9月25日夜
- 浅瀬
- 9月26日辰刻（8時）
- 平家の舟
- 1日中戦う

- 児島
- 八嶋
- ③ 事件

- 児島（当時は島）の岸に平家，5町（109メートル）隔てて藤戸の渡（今は陸地）に源氏がそれぞれ陣を布いた。舟がなく源氏は攻められない。
- 平家は「ここわたせ」とまねく。
- 佐々木盛綱は浦の男に，大口袴，小袖，白鞘巻を与え，この海峡を馬で渡す場所を尋ねる。男はだまされて浅瀬を教える。
- 下臈は節操がないからというので，盛綱は浦の男を殺す。
- 平家の挑発に応じて，盛綱と家子郎等7騎が浅瀬を渡す。
- 大將軍範頼，土肥実平は制止できない。それどころか盛綱に先駆けされる。
- 盛綱に続いて源氏3万騎が児島に攻め渡る。
- 源平両軍は激しく戦う。平家は八島に退く。
- 頼朝は盛綱の先陣の功に対し，備前児島の土地を盛綱に賜わった。

以上，3項目にわたって，文章構成の面から「藤戸」の合戦場面の物語性について概観した。『平家物語』における「藤戸」は，近江源氏佐々木三郎盛綱の高名談であるといわれている。たしかに，物語性としては変化に乏しい。同じ先陣争いでも，宇治川の佳話とは大いに違うし，高名談としても，扇の的の手柄ほど華々しさはなく，人情悲劇といっても敦盛の最期ほどの悲壮な活劇ではない。しかし，単なる高名談として片付けるわけにはいかない。なぜならば，この「藤戸」を題材として，「謡曲」の「藤戸」が創作されているからである。それなら，「謡曲」の作者である世阿弥はこの『平家物語』の「藤戸」の物語性のどこに文学的価値を見出したのであろうか。その理由を見出すために，「謡曲」「藤戸」の物語性をしらべてみなくてはならない。

① 登場人物

- ワキ 佐々木盛綱
- ワキツレ 従者（2人）
- シテ 浦の男の母
- アイ 下人
- 後シテ 浦の男の亡霊

② 背景—台舞上—（場所・時・自然）

- 藤戸
- 浮洲の岩の少しこちらの深み 去年3月25日夜
- 老女の私宅
- 夜明け
- 彼岸

③ 事件

- 佐々木盛綱の国入り。訴訟ある者は出るように触れる。
- 浦の男の老母が泣きながら、盛綱に殺されたことを恨みながら訴える。
- 盛綱は無実だと否定する。
- 老母は、せめてものことに、わが子の亡き跡を弔うようにと哀願する。
- 盛綱は、去年の3月25日の夜に、藤戸の渡しを教えた浦の男を殺したいきさつを告白する。
- 老母は、世の無常を嘆きつつ、わが子同様に自分も殺してくれと盛綱に詰め寄る。
- 盛綱は下人に命じて、老母を自宅まで送らせる。
- 管絃講による弔い、殺生禁断による弔いを命じ盛綱自身は大般若経を読んで、浦の男の弔いをする。
- 浦の男の亡霊が水上（舞台）に出現し、わが身の不運を嘆き、盛綱と対話する。
- 浦の男の亡霊は、殺された前後を詳細に語り、藤戸の海底の猛悪な龍神となって盛綱を恨んで祟りをしようと思っていたと語る。
- 盛綱の弔いを受けた浦の男の亡霊は、彼岸に至り着いて成仏の身となる。

以上3項目にまとめた「謡曲」の「藤戸」と、『平家物語』の「藤戸」との物語性を対比してみると次のようになる。

④ 物語性の対比

- 登場人物については、主人公の佐々木盛綱は『平家物語』にも「謡曲」にも中心人物として登場するが、相手役としての中心人物は前者が浦の男であり、後者は浦の男の母である。両作品ともに登場人物が少く、人物の対照の妙味は少い。しかし、中心人物の個性は書き分けられ、性格の発展にも意を用いている。すなわち、盛綱は源氏の武将として権謀術策に長けたすぐれた人物として描かれている。「謡曲」においても、自分の前非を認め、浦の男の弔いをしてその妻子をも世に取り立てよう計らう人情あふれる人物として描かれている。また、浦の男は平凡な人間像が想起されるが、その母親については、子を思う慈母として哀切極まる描き方をしている。以上単純な構成であるが、物語性としては成功しているといつてよい。
- 背景としては、「謡曲」はもちろん舞台上の演技と謡いや語りを中心であるから特に注意する点は少い。ただ、浦の男を殺して沈めた場所が、盛綱の告白によって明らかにされ「浮州の岩の、少しこなたの水の深み」と具体的に示されている点が目立つ。『平家物語』では、海上の平家と陸上の源氏が藤戸の渡しを間にして対峙しているさまが、まるで絵巻物のように描かれている。日時も克明に描かれて、物語の発展を印象づけている。
- 事件として総括することは、『平家物語』では盛綱が浦の男を殺害したことと、

馬によって海を渡したことの2つの点である。一方、「謡曲」では、国入りをした盛綱が浦の男の老母の願いに応じて、浦の男の亡霊を成仏させるという点にポイントがある。もちろん、「謡曲」は詞章であるから、実景描写ではなく台詞によって事件の発展を知るのである。そういう点を考慮しても、やはり『平家物語』の「藤戸」の後日談としての「謡曲」の「藤戸」が位置づけられる。『平家物語』の藤戸の合戦は、他の『平家物語』の合戦場面にくらべて極めて単調であり平凡である。しかし、武将として功績には変りない。『吾妻鏡』には次のような表現が見られる。「佐々木三郎盛綱馬により備前の国児島に渡り、左馬頭平行盛朝臣を追伐の事、今日御書を以て御感の仰せを蒙る。其の詞に曰く、昔より河水を渡るの類有りと雖も、未だ馬を以て海浪を凌ぐの例を聞かず、盛綱の振舞希代の勝事也と云々」。したがって、前述したように、『平家物語』の藤戸の合戦は、盛綱の高名談といえるのである。しかし、ここで忘れてはならないのは、犠牲となった浦の男の扱ひである。戦場の習いとはいえ『平家物語』では、さらりと書き捨てられている。こうした非情さは「藤戸」ばかりではなく、『平家物語』には随所に出てくる。諸行無常という仏教思想で全篇が貫かれているとはいえ、所詮、『平家物語』は全篇が源平の争乱を主題とし、力に対する礼賛と力の衝突が描かれているからである。こうした非情さの救済が「謡曲」の「藤戸」なのである。元来、「謡曲」は古典的幽玄趣味と当時の仏教思想を基調としている。従って、『平家物語』の藤戸の合戦は「謡曲」の「藤戸」によって精彩を帯びてくるのである。世阿弥は「藤戸」を書くにあたって、古歌・古典の引用と仏語の駆使によって、事件を円滑に終結させているのである。いいかえれば、藤戸の合戦は『平家物語』と「謡曲」とが結合することによって、完成された文芸作品となるのである。

4. おわりに

普通行われる「謡曲」約200番のうち、名曲と言われるものは、ほとんど世阿弥の作である。もちろん「藤戸」も例外ではない。世阿弥は『平家物語』という膨大な絵巻物に取組み、能という芸術を完成させた。この絵巻物の1齣1齣を切りとって、劇的構成としてふさわしいものを選択していったのである。世阿弥は能において「花」を主張した。「花」とは一言にしていえば舞台上の魅力であり、観客に応じて演者が行う1つの自由精神である。さらに世阿弥は和歌・連歌における理念を常に摂取しつつ、一面叙事的要素を『源氏物語』や『平家物語』から得て、見事な象徴演劇を完成させたのである。「藤戸」は、こうした大天才世阿弥の創作眼に映じた素材であった。その素材としての『平家物語』における合戦の場面と、いわゆる「劇」という概念に最も近い4番目物の「藤戸」のかかわりとを考察した。世阿弥は主人公盛綱の道義性を否定することなく、功名心と信仰心とを合わせもった人間像を描き得たのである。いうまでもなく『平家物語』の作者も、

盛綱を奉公心と功名心とをもった武将として肯定しているのである。ただ両者の違いは、弱者を救う人間性の有無があるだけにすぎない。しかし、それも決して「藤戸」の劇的構成を削減するものではないのである。

参考文献

- 1) 『鑑賞 日本古典文学 平家物語』 富倉徳次郎ほか 角川書店 昭和50年
- 2) 『平家物語全注釈 全4巻』 富倉徳次郎 角川書店 昭和43年
- 3) 『平家物語 2冊』 高木市之助ほか 岩波書店 昭和35年
- 4) 『平家物語評講』 佐々木八郎 明治書院 昭和38年
- 5) 『平家物語』 石母田正 岩波書店 昭和32年
- 6) 『平家物語の形成』 水原 一 加藤中道館 昭和46年
- 7) 『謡曲集 2巻 (日本古典文学大系)』 橋道万里雄・表 章 岩波書店 昭和35年
- 8) 『能狂言』 能勢朝次 至文堂 昭和26年
- 9) 『能の世界』 古川 久 社会思想社 昭和35年
- 10) 『能楽論集 日本古典文学全集』 表 章 小学館 昭和51年
- 11) 『謡曲集 日本古典文学全集』 小山弘志ほか 昭和51年

On the dramatic construction of 'Fujito'
— 'Fujito' in the Tale of the Heike and Noh play 'Fujito' —

Kazunori YAMAOKA

Faculty of College of Liberal Arts and Science.

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

The Tale of the Heike was written in the 13th century, and it tells us a series of the battles between the Taira clan and the Minamoto clan. 'The Incident of Fujito' was one of the stories in the book. In the 15th century a Noh play 'Fujito' was composed from 'the Incident of Fujito'. I studied the dramatic construction of these two works.

Fujito is originally the name of a place where a battle was fought between the Minamoto clan and the Taira clan. Our university campus commands the ancient battlefield. It is now located on the land, but it was a ferry crossing when the battle was fought. The Minamoto clan deployed 30,000 horsemen around Fujito, while the Taira clan gathered 500 warships off the opposite shore Kojima. Moritsuna Sasaki, one of the generals of the Minamoto clan, dared to ride across the strait with his horsemen and succeeded in making a surprise attack on the warriors of the Taira clan. A fisherman had showed him the shallows where he and his horsemen could cross the strait on horseback. Mercilessly he killed the fisherman in order to keep his military operations secret. In Noh play 'Fujito', however, Moritsuna Sasaki performed a religious service for the repose of the fisherman's soul afterwards.